

---

# DREAM C CLUB NIGHT (ドリームクラブナイト)

KOKI

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DREAM C CLUB NIGHT (ドリームクラブ ナイト)

### 【Nコード】

N2392T

### 【作者名】

KOKI

### 【あらすじ】

ピュアな男性だけが入会できる大人の社交場・ドリームクラブ。そのドリームクラブから、地図と3枚の金色のカードがユウ コウキ レイジに届いた。何故この3人に届いたのか、そしてドリームクラブに起こる出来事とは。

ドリームクラブ狭しと活躍するガールズトークッシュ・シチュエーションコメディ、本日開演です！

## 人物紹介（前書き）

この小説は、「ドリームクラブ ディア・ガールズ」の主人公を3人にした小説です。

漫画と同じセリフになるところがありますが。そこはご了承ください。

## 人物紹介

どうも。今回初めて書かせていただきます。

今回書くのはドリームクラブのマンガにちょっと工夫を入れた二次創作の小説です。

この小説の主人公は3人です。

キャラの画像はありませんが、特徴を書かせていただきます。詳細は小説が進む毎に付けたします。

・響 ユウ 20歳「三兄弟の末っ子」

### 特徴

- 1：身長が小さい男の娘キャラ（ロリシヨタ）
- 2：緑色の髪の毛「スリングショートレイヤー」
- 3：一人称「僕」

・響 コウキ 22歳「三兄弟の次男」

### 特徴

- 1：身長184cm
- 2：銀色の髪の毛「スパイシーウルフ」
- 3：一人称「俺」
- 4：絶叫マシーンが苦手

・響 レイジ 24歳「三兄弟の長男」

## 特徴

- 1：身長186cm
- 2：赤紫色の髪で右目が隠れている「ミディアムショートウルフ」
- 3：一人称「俺」
- 4：かなりのドS

メニュー1(1) : 3人のお客様(前書き)

店の前に立つユウ コウキ レイジ その手には・・・。

メニュー1(1)：3人のお客様

「ドリームクラブ前」

ドリームクラブの前に立つ3人・・・。

コウキ「ここがドリームクラブか・・・」

ユウ「キラキラだね〜」

レイジ「眩しすぎるな。」

そう話していると・・・。

受付嬢「いらっしやいませ。ご入店をご希望ですか？」

コウキ「あ、はい。あ、一応カードを持っているんですけど、見せ  
た方がいいですか？」

受付嬢「はい。ここで見せていただければいいですよ(にこにこ)」

コウキ「それじゃあ・・・これで。」

ユウ「僕も〜」

レイジ「はい、これで。」

3人は金色のカードを見せた。

受付嬢（そ、そのカードは!!!）

「ドリームクラブ内」

コウキ「・・・で、ここがお酒を飲むお店で、」

レイジ「女の子がつくところというのはわかった。」

コウ「だけど・・・」

コウ コウキ レイジ「なんでこんなにこの席にいるんだ!!!」

コウ、コウキ、レイジの座っている席には7人の女の子がいた・・・。

亜麻音「そ、それはあなたがそのカードを持っているから・・・です。」

コウキ「え？あの金色のカード？」

亜麻音「えっと・・・」

コウキ「あ、ごめんごめん、名前言ってなかったな。俺は響 コウキっていうんだ よろしくな」



亜麻音「あつ、亜麻音です。よろしくおねがいします・・・（カアア・・・／＼／＼）」

コウキ？

怜香「しかし本<sup>ほん</sup>当<sup>だ</sup>やったんやな。VIPカードのさらに上のいく幻のカードがあるって聞いたんやけど」

怜香がコウキに近づいて、

怜香「コウさん、コウキさん、レイジさん・・・あんたら何者や？（じじっ）」

コウ コウキ レイジ「ふ、普通の客です!!」

コウキ「じ、実はさ、数年ぶりに親父から手紙が届いて、この地図と、このカードが入っていたんだ。」

理保「そのカードはね、このお店にいつでも無料で入れちゃうんだよ〜」

コウ コウキ レイジ「無料!?!?」

コウキ「で、女の子も大勢でついてくれるのか!?!?」

亜麻音「いえ・・・私以外は珍しいから集まってきちゃって・・・」

と、話していると・・・

雪「みんな〜〜〜!!大変!!大変だよ〜〜〜!!」

ナオ「どっ、どうしたのセツちゃん？」

雪「いいから〜〜っ!!みんなちよつとこっち来てー!!亜麻音  
チンも〜〜!!」

亜麻音「あっ・・・えつと・・・」

コウキ「俺たちは大丈夫だ 行ってきな」

と、ホストガール達が席を離れる・・・。

コウキ「どうしたんだろうな？」

ユウ「なにかあったのかな？」

レイジ「すぐ帰ってくるだろ・・・。」

メニューー1(1)：END

メニュー1(2)：閉店の危機！？(前書き)

どうも、遅くなってすみません。

俺は高3なので色々大変なんです(汗)

それでは、お楽しみください。

。。。  
雪ちゃんに呼び出されたホストガールのみんな、一体どうしたのか。

## メニュー1(2)：閉店の危機！?

怜香「ええっ!?!」

雪以外「ドリームクラブが閉店する!?!」

みお「ほ、ほんとうなんですかその情報は?」

怜香「セツちゃんの情報は正直怪しいで〜。〜。〜。」

雪「間違いないよ!!セツちゃん聞いたんだもん!! 店長と受付ちゃんが話していたの。〜。」

少し前・・・

雪「お客さんにもらっちゃった? 受付ちゃんに見せにいこー?」

店長の声「ー今日・・・次のオーナーが店を見に来るそうだ・・・」

雪(次のオーナー?)

受付嬢の声「・・・みんな悲しむでしょうね まさか閉店してしま  
うなんて・・・」

雪（閉店！？（ガーン）

魅杏「じよ、冗談じゃないわ！！ 私はまだ・・・やめたくない！！」

ナオ「ボクもだよ！！このお店大好きだもん！！」

みお「魅杏ちゃんも好きなんですな〜このお店」

魅杏「べっ べつにそういうわけじゃ・・・／／／／（カアア・・・」

怜香「・・・う〜ん これはマズイな〜 もしかしたら、さつきスペシャルのSPVIPカードを持ったお客さん・・・あの人が次のオーナーかもしれないで〜」

みんな「！！！？」

魅杏「一般客を装って偵察に来た・・・十分考えられるわね。」

雪「えーっ！！じゃあこのままじゃ本当に閉店しちゃっしょー！！（泣）泣」

ナオ「何か止める方法ないのかな〜？（泣）」

るい「んーっ・・・あるわよ！！っだけ」

みんな「えっ！！！」

「ドリームクラブ 店内」

コウキ「遅いな〜・・・。」

ユウ「遅いね〜・・・。」

レイジ「すぐ来るだろ。」

コウキ「でも、あれから30分経つぜ？もうそろそろで持ち時間無くなっちまうぞ？」

ユウ「待てば待つほど、いい事があるって言うでしょ？」

コウキ「いや、待てば待つほど持ち時間が減るんだが（ー・ー・ー）」

レイジ「全く・・・（溜息）」

と、話していると・・・。

ホストガール「すいません、ここからは1対1の接客を行いますので、席を移動していただいてもよろしいでしょうか？」

ユウ「ん？は〜い。」

レイジ「わかりました・・・。」

コウキ「え？1対1？まあいいや、早く来ないかな？・・・。」

と言っていると、コウキの席に・・・

亜麻音「あ・・・あのっ、遅くなりました・・・。」

コウキ「あ、お帰り　心配したぜ・・・ってええ!？」

そこには、胸元が見えるチアガールの服を着ていた亜麻音ちゃんがあった。

コウキ「ど、どうしたの!?その格好!?!?!」

亜麻音「あっ・・・そっ　そのっ!!SPVIP会員様へのささ・・・  
・サービスなんですっ!!?!?!」

少し前・・・

るい「いい？　方法は1つ　オーナーを虜にしちゃうの?」

亜麻音　雪「虜?」

るい「そう!私達に夢中になれば　お店を存続させたくなるでしょ

？というところで、雪は緑色の髪の子を、亜麻音ちゃんは銀色のツンツン頭、私は赤色の髪長男さんを虜にさせるわ」

亜麻音「で、でもどうやって虜にすれば・・・」

るい「そんなの決まっているじゃない・・・女の魅力よ？」

亜麻音「私っ！！この人を虜にしてみます！！」

亜麻音「うっ・・・うっふん？」

コウキ「・・・／／／／」

亜麻音「・・・／／／／」

1年より長い10秒だった・・・らしい

亜麻音「・・・(うるっ」

コウキ「!?!?」

亜麻音「やっぱり私には無理ですうっ！！！！／／／／(泣」

コウキ「あ、亜麻音ちゃん!?!?」



「ユウの席」

ユウ「ん？何かユウキ兄ちゃん達が追いかけてっこしてるぞ？何やってるんだろ？」

ユウが呟いていると・・・

雪「も～～っ 亜麻音チンはダメだな～～」

ユウの席に雪ちゃんがやってきた。

雪「よろしくね お兄ちゃん」

ユウ「あっ！こんな所に小学生がいる」

雪「ひっど～～い！！セツちゃんは大人だよ！！ってかお兄ちゃんも小さいでしょ！！」

ユウ「ちっさい言うな～～！！」

雪「も～～っ！！この制服はコスプレなの！！ちゃんとお酒も飲めるレディーなんだから・・・ってあれ？」

ユウ「子どもはお酒飲んじやいけないんだよ～～」

と言って、お酒を取り上げる

雪「だから!?!子供じゃないも~~~~ん!?!」(ぶ~~~~っ)

「レイジの席」

レイジ「全くあいつらは……少しは静かにできないのかよ。」

と、呟いていると

るい「やっぱり、私がやらないといけないみたいねえ……」

レイジ「え……な……なな……な／／／」

そこには、水着姿のるいがいた。

るい「はじめまして 私は るいよ」

レイジ「な……なんで水着なんですか!?!／／／」

レイジは顔を真っ赤にしていた。

るい「言ったでしょ。これはサービスよ。だって、あなたはこの世で一番特別なお客様なんだから……」

レイジ「と、特別？／＼／＼」

るい「そう……と……く……べ……つ？」

レイジは石のように固まっていた

レイジ「やばい……目のやり場が／＼／＼」

「扉の向こう」

ナオ「……さすがのいさんだね。羨ましいよボク……」

怜香「よしっ！あの調子ならい美味く行けそうやでー！……」

るい「ねえ……レイジさん……（胸を寄せる）」

レイジ「……」

レイジは無言で立ち上がる。

レイジ「おかしい・・・絶対におかしいよ。さっきからのみんなの様子が。」

るい「えっ!?!? な、何がかしら・・・」

ユウ コウキ「えっ!?!? どういうこと?」

レイジ「あの時、みんなが呼ばれた後からおかしい。何があったのか、よかつたら話を聞かせてくれ。そこにいるみんなも。」

みんな「!?!?」

ナオ「びっ、びっくりした」

怜香「何や・・・バレとつたんやな〜」

亜麻音「・・・(ダッ)」

怜香「亜麻音ちゃん!」

亜麻音ちゃんはコウキたちに向かって話した。

亜麻音「お願いです!!私、このドリームクラブが大好きなんです!!だから・・・お店を潰さないでくださいっ!!」

ユウ コウキ レイジ「はぁっ!?!」

店長「何の話だ?」

と、お店に40歳くらいのコウキに似ている銀色の髪の男性が現れた。

ホストガールのみんな「店長!?!」

ユウ コウキ レイジ「お、親父!?!」

ホストガールのみんな「お父さんっ!?!」

店長「おお、久しぶりだな!!我が息子達!店に来ていたのか。」

コウキ「・・・って親父がこの店の店長なのか!?!」

店長「なんだ?手紙に書いてあっただろうが。見なかったか?」

レイジ「手紙入ってねえし、地図と3枚のカードしか入ってなかったぞ!?!」

店長「なんだと?と言う事は、肝心の手紙の方を入れ忘れていたのか。はっはっは」

ユウ コウキ レイジ「笑い事じゃねー!?!」

亜麻音「あっ、あの店長!! お店が閉店してしまうというのは本当  
なんですか!?!」

店長「は? 閉店? . . . ああ! 店の前のパスタ屋が閉店するとい  
う話か。」

亜麻音「ぱ . . . パスタ屋?!?! / / / /」

店長「みんなよく通っていたら。本当に残念な話だよ。」

雪「 . . . . (汗) 」

逃げる雪ちゃん . . .

怜香「セツちゃん!!」

雪「!!!! (ギクツ) 」

怜香に捕まる雪ちゃん . . . 。

雪「ごーめんーなーさーい!! (泣) 」

亜麻音 (ふふ、よかった . . . 店が潰れなくて . . . 本当によかつ

た  
)

コウキ「で・・・親父、俺たちを手紙なんかで呼び出して、何か用があるんじゃないかねえのか？」

店長「おお、そうだった。ユウ、コウキ、レイジお前たちに頼みがあるんだ。ホストガールの諸君も聞きたまえ！」

店長「ユウ、コウキ、レイジ、お前たちには今日から、このドリムクラブで働いてもらう！」

みんな「ええええええ!!!?」

メニュー1(2)：END

メニュー2(1)・魅杏ちゃんと仲良くなるぜ!!(前書き)

2話の続きです



メニュー2(1)：魅杏ちゃんと仲良くなるぜ!!

コウキ「・・・よし!」

ユウ「このネクタイきつい〜!!」

レイジ「我慢しろ。そのくらい。」

受付嬢「ふふふ、とっても似合ってますよ。3人とも(にこっ)」

コウキ「なんか恥ずかしいな〜。」

なぜこうなったのか？時を少し戻します。

「昨日：ドリームクラブ」

店長「ユウ、コウキ、レイジ、お前たちには今日から、このドリームクラブで働いてもらう!!」

みんな「ええええ!!!!?」

コウキ「何で俺たちが!？」

店長「社会勉強だ。」

ユウ「社会勉強？」

店長「お前たちは学校で勉強している事をここで発揮できるだろ。」

レイジ「なるほど、そういうことか（ニヤッ）」

亜麻音「あの……どういふことかあまり分かりませんが……」

店長「おお、言い忘れていたな。実はな、俺の息子はある学園のある部活に入っているんだ。」

ナオ「ある学校、ある部活？」

店長「白皇学院のホストクラブだ。」

みんな「え〜！？」

雪「白皇学院って、お金持ちとエリートが通う超有名学校だよね！？」

注：この話に出てくる白皇学院は練馬区の学校とは全く関係ありません。女顔の執事や、墮落した金髪シンテールの女の子が通う学校とは全く関係ありません。ご了承ください。

理保「す、す〜い……！」

るい「しかもあそこのホストクラブはとても人気で、学園祭では長蛇の列なのよ!？」

魅杏「で、でも・・・なんでその人たちがここに？」

店長「彼らはそのホストクラブでとても人気のあるメンバーなんだ。コウキはナンバー2のホストで、主に金銭関係とスケジュールの設計をやっている。ユウは主に調理をやっている。レイジはナンバー1のホストで、ビジュアル、服飾系をやっているんだ。」

コウキ「ちなみに、親父は初代ホストクラブの部長をやっているんだぜ」

みお「そ、そうなんですか!?!？」

店長「ちなみに、こいつらの夢は・・・」

ユウ「言わなくていい!?!」

店長「だそうだ。」

るい「つまり、体験学習みたいなものね？」

店長「そういうことだ。明日から1週間、ここで働いてみな。ちなみに、俺はしばらくここに来れない。だからレイジ、お前に店長代理を任せる。これも指揮がとれるようになる練習だ。わかったな？」

レイジ「わかった。任せておけ(ニヤツ)」

ユウ「よし、頑張るぞ!?!」

コウキ「タダ働きだけは嫌だぜ？」

店長「もちろん、その分の給料はちゃんと渡そう。」

こうして、ユウ コウキ レイジはドリームクラブで働くことになったのだった……。

「ドリームクラブ 更衣室」

魅杏「ねえ……ちょっとこの服……小さすぎるんじゃないの？」

雪「うん！だって、セツちゃんのだもん」

魅杏「……」

ポカッ！！

雪「いった〜い（泣）」

魅杏「だったら自分で着なさいよ！〜！」

「ドリームクラブ 玄関」

雪「あーあ・・・またダメだったな〜っ」

コウキ「ん？どうした？セツちゃん？」

雪「あ、コウキっち。その〜魅杏ちゃんに怒られちゃって・・・」

コウキ「またイタズラか〜？」

雪「違うも〜ん！！話すきっかけが欲しかったんだよう」

コウキ「話すきっかけ？」

ナオ「あーっ！！それボクもボクも！！」

コウキ「ナオちゃん！みおちゃん！」

みお「魅杏ちゃんは人付き合いが苦手なところがあるんどす。そのせいで一部のお店の子たちからも少し浮いた存在になってしもとるんどす」

コウキ「え〜？そうは見えねえけど・・・」

ガチャ・・・

魅杏が玄関に出てくる

コウキ「おう、魅杏ちゃんおはよう」

魅杏「・・・お先に失礼します」

コウキ「・・・」

しばらく黙るコウキ

コウキ「チクシヨーー！！こうなったら魅杏ちゃんと仲良くなるよう  
作戦だ！！（泣）」

みお「それはええ考えどすなー！！」

ナオ「で！！どんな作戦なの それ！？」

コウキ「これから考える！！（キツパリ）」

ナオ「ねえ・・・あの店長代理大丈夫なのかな？」

みお「少し・・・不安どすな」

雪「ねえ！！翔ちゃんは放っておいて3人で考えよーよ！！」

こうして・・・ナオ、みお、雪の3人で魅杏ちゃんと仲良くなる方

法を探したのであつた・・・。

コウキ、ちゃんと務まるのか(´・`・´)

メニュー2(1)：END

メニュー2(2) : 作戦決行?

「ドリームクラブ 店内」

みお「ナオちゃん！セツちゃん！できましたえ〜」

ナオ「え！？できたって何が！？」

みお「飲めば一発で誰とでも仲良うなれる薬どす？ホレ薬を参考に作ってみたんどす〜」

手には変な臭いを漂わせる薬らしきものがあつた。

ナオ「ぐざ〜っ！！ダメ！！やばいつて・・・それ」

みお「え？ダメどすか？コレ・・・」

雪「フッフッフ〜セツちゃん特製ケーキいっぱい作ってきたよーっ！！」

ナオ みお「お〜っ」

雪「これで魅杏ちゃんとお茶会すれば親睦度もグッとアップだよー！！」



ナオ「グッドアイデアだよ!!セツちゃん!!」

みお「ついでにこの薬も入れときましょか!!」

雪「いや・・・それは・・・いいかな・・・」

魅杏「え?・・・ケーキ?・・・ごめんなさい。今ダイエット中の。悪いけど、みんな食べて。」

ナオ みお 雪(ガーン!!)

雪「あーあ・・・セツちゃんのケーキ台無しだよお・・・。」

みお「ナオちゃんはなんかええアイデアないですか?」

ナオ「拳で語り合えば親友になれる・・・気がするんだけどなあ」

雪「少年マンガじゃないんだから・・・」

ナオ「そうだ!!」

雪「何か思いついたの!？」

ナオ「うん!!」

「都内 街中」

魅杏ちゃんが街中で歩いている所をナオ みお 雪が隠れて見ていた……。

雪『こんなところに隠れてどーするの!?!』

ナオ『いーから!見てて!!--』

そこに、ソフトクリームを持ってランニングする柔道家がやってきた……(かなり不自然)

ドサツ!!--

魅杏『きゃっ!!--なっ……何するのよ!!--服が汚れたじゃない!!--』

みお『魅杏ちゃん!!--』

ナオ『大丈夫!!--道場の人に頼んだの!!--』

雪(ソフトクリーム持ちながらランニング……(汗))

道場の人『す、すまないっス』

魅杏『すまないじゃすまないわよ!!--』

ナオ「あつれ〜つ魅杏ちゃんだぐーぜーん!! (棒読み)」

魅杏「ナオさん！セツちゃん！みおちゃん！ど、どうしてここに！？」

ナオ「あ！！それより大変服汚れてるじゃん！！近くにいいお店があるんだ！！紹介するよ！！」

魅杏「ちよつ！！どこへ連れてくのよ！！」

ナオ「いーからいーから」

みお 雪「・・・(汗)」

「銭湯」

魅杏「・・・つてここ銭湯じゃない！！」

ナオ「仲良くなるには裸の付き合い！！これでしょ！！」

雪「う・・・うまくいかなあ〜」

みお「まあ・・・やってみましょ！！」

魅杏「ちよつと！！銭湯でどうしろっていつのよ」

ナオ「こ、このおばちゃん染み抜きうまいんだ〜だから待つ

てる間さ一緒にお風呂入るーよ!!」

魅杏「!?!?わっ・・・私はいいわよ!!!待ってるから!!!」

ナオ「そーいわずにさ」

魅杏「ちよっ!!」

みお「気持ちええどすえ〜」

雪「疲れも一発でとれちゃうよ〜!!」

魅杏「待つ・・・」

そこに・・・

コウキ「あれ?みんな銭湯に入りに来たのか?」

魅杏「コウキさん!」

コウ「僕もいるよ〜」

雪「コウちゃんも来てたんだ!」

みお「あれ?レイジはんは?」

コウキ「後で一人で入りたいって。」

ナオ「あらら・・・ってなんでコウキさんがここに？」

コウキ「なんでって・・・俺たちはこの銭湯の常連だからな。毎日仕事終わりで入りに来ているんだよ。」

みお「そうなんですか。」

コウキ「それより、お前らも何でここにいるんだ？」

雪「それはね、(コニヨコニヨ・・・)」

コウキ「なるほどな・・・ってかソフトクリームのは奴は不自然すぎるだろ(ー；ー；)」

雪「だよね〜(汗)」

ナオ「とにかく、早くお風呂にはいるー。」

魅杏「で、でも・・・」

コウ「大丈夫!!ちゃんと男湯と女湯に分かれているから」

魅杏「当り前でしょ!」

雪「ねえ〜入ろ〜よ〜」

魅杏「もっ・・・もう・・・分かったわよ!!入ればいんでしょ!」

ナオ みお 雪「ヤターーーーッ!!」

X  
I  
I  
I  
2  
)  
2  
)  
:  
E  
N  
D

## メニュー2(3)：レッツ バスタイム

「銭湯 女湯」

雪「わーっ！っ！貸し切りだ〜っ！」

魅杏、雪、みお、ナオちゃん  
の4人は銭湯のお風呂に入っていた。

魅杏 雪 みお ナオ『ぼ〜〜〜〜』

あと、もう2人いた。。。

「銭湯 男湯」

コウキ「もう2人ってなんだよ！！俺たちはおまけか！！言っておくけど、俺たちが主人公だからな！！」

ユウ「誰に言ってるの？コウキ兄ちゃん・・・(汗)」

コウキ「あ・・・す、すまん。俺とユウしかないのに、誰が言ったんだ・・・」

アニメでいう、ナレーションである・・・。

ユウ「あ、そういえば今日、有名人にあっただ」

コウキ「え！？ほんとか！？誰だ！？」

ユウ「なでしこジャパンの・・・」

コウキ「ユウー！」

ユウ「あ・・・ご、ごめん・・・その話はダメだったね・・・」

コウキ「・・・」

「銭湯 女湯」

雪「きもち～～～～・・・」

ナオ「だね～～」

みお「どす～～」

ナオ『って和んでる場合じゃないよ！！魅杏ちゃんとか何か会話しないとー！！』

ナオ「あ！昨日道場でさ投げ技の練習してたんだけどね・・・」

魅杏「ふーん・・・」

雪「セツちゃんね～～この前新作ケーキですっごいの作ったんだよ！！」



魅杏「よかつたわね・・・」

ナオ 雪「か・・・会話が続かない!!」

魅杏「じゃあ温まつたし・・・先に帰るわね」

みお「ま・・・待ってえ魅杏ちゃん!!」

つるつ・・・。

みお「きゃっ!!」

むにゅっ!!

魅杏 みお「ああん!!」

たぶん・・・

魅杏「モ、モデルの私より・・・スタイルがいいなんて・・・」

みお「ごっ!!ごめんなさい!!大丈夫ですかあ!？」

魅杏「え・・・ええ。それじゃ・・・ごゆっくり・・・(もっ少しバストUPしたいわね・・・)」

ナオ「ああっ!!ちよつと待っ!!」

「女湯 更衣室」

魅杏「もう、行きたい所があったのに・・・時間が無くなったじゃない。どうしてくれるのよ。」

おばあさん「お嬢さん、服のシミ取れたわよ(にこっ)」

魅杏「あ、ありがとうございます・・・。」

おばあさん「あなた、スタイルいいわねえ！モデルとかやっているのかい？」

魅杏「ええ、まあ・・・。」

おばあさん「頑張りんさいよ！！モデルなんて滅多になれないんだからさ！」

魅杏「はい。それでは・・・。」

おばあさん「またおいでよ(にこっ)」

魅杏「あら・・・もう暗いわ・・・早く帰らないと・・・。」

コウキ「お、魅杏ちゃんも上がったのか？」

魅杏「あ、コウキさ・・・ん？」

魅杏ちゃんの見たコウキはいつものツンツンとした髪型ではなく髪の毛が垂れ下がった髪型で、女の子と間違えるくらいだった。

魅杏「えっと・・・コウキさんですよね？」

コウキ「は？何言ってるんだよww当り前じゃねえか」

コウ「あ、魅杏ちゃんも上がったんだ」

コウキとコウの髪型は似ていた。

魅杏『似ている・・・』

コウキ「ん？どうした？」

魅杏「い、いえ！！何でもありません！！それじゃあまた明日！」

コウ「バイバ～イ」

コウキ「何だったんだ・・・？」

コウ「それにしても、魅杏ちゃんってスタイルいいよね」

コウキ「そりゃそうだろ。魅杏ちゃんはモデルをやっているんだからな・・・ん？そうか、その手があったか！！」

コウ「？」

「翌日 喫茶店」

みお「はぁ・・・きのうはあかんどしたな〜」

ナオ「もっと自然に仲良くなる方法・・・ないのかなあーっ」

ピリリリ・・・

雪「あ！コウキっちからだよ！」

「ホストガール全員に連絡。今日シフト入ってる人は可能なら1時間早く来てくれ！よろしくな！！from コウキ」

ナオ「・・・なんだろう？」

「ドリームクラブ 店内」

魅杏「なっ・・・なんなの！？この撮影セットは」

コウキ「今度な、ホストガールのプロマイドを販売することにしたんだ。でな、プロモデルの魅杏ちゃんに、講師をしてもらいたいんだ！ー！」

魅杏「ええっ！ー！いつ・・・嫌よ！ー！なんで私が！ー！」

ナオ「や・・・やっぱり女の子らしいポーズがいいのかなあ〜」

雪「セツちゃんはこのポーズにしよー!!」

ナオ「え〜変だよそれ。記念写真じゃあるまいし〜」

雪「ナオちゃんこそ似合っていないよそのポーズ・・・」

ナオ「じゃあどうしろってゆーんだよ!!」

魅杏「もっつ!!」

魅杏ちゃんがセツちゃんとナオのポーズを指導する。

魅杏「セツちゃんはこうして・・・かわいらしく!!ナオさんは・・・元気な感じに!!」

カシャッ!

魅杏「うん!こんなものね。いい感じよ!」

みお「すごいどすな〜魅杏ちゃんのアドバイスで、見違えるほど良くなりましたえ〜」

ホストガールの人たち「私にも教えて魅杏ちゃん!!」「私も私も〜!!」

魅杏「えっ!!ちよつと!!わ・・・わかつたから!!一人ずつ!!  
!一人ずつね!!」

コウキ「よっしゃ!!魅杏ちゃんと仲良くなるう作戦成功だな!!」

みお『どうやらウチらは甘く見ていたようだな。魅杏ちゃんの得意な事で話す機会を作った・・・コウキはんは考えていたんどす!!ごく自然に魅杏ちゃんと仲良くなれる方法を!!コウキはん・・・思つとるより、頼りになる人なのかもしれまへんな』

その夜・・・

コウキ「さっきみおちゃんがくれたけど、なんだろう?これ・・・」

コウキはみおちゃんからもらった箱を開けてみると・・・ポコポコと気泡を立てる薬が入っていた・・・。

コウキ「ぐっぜー!!!なんじゃこりゃー!!!」

メニュー2(3)・・・END

メニュー2(3)：レッツ バスタイム (後書き)

今日の日記

ユウ「魅杏ちゃん、みんなと仲良くなれてよかった」

コウキ「なんで主人公の俺がこんな目に・・・ぐぜえ(泣)」

レイジ「・・・俺の事、忘れられているような・・・。」

**VIPメニュー1(1) : 夏休み!! (前書き)**

VIPメニュー : 本編とは全く関係ないオリジナル小説です

感想をお待ちしております!!



VIPメニュー1(1) : 夏休み!!

「ドリームクラブ 店内」

店長「次の木曜日にドリームクラブの改装工事をするから、来週の土曜は全員休みだ!!」

みんな「やった !!」

雪「久しぶりの休みだ !!」

みお「土曜はたっぷり発明の研究をすれどすえ〜」

怜香「ボウリングの練習に専念するで〜」

コウキ「俺は家でたっぷり寝るか」

ユウ「何でコウキお兄ちゃんだけ寝ているのさ!!」

コウキ「せっかくの休みだぜ?何をしようが俺が決める事だし」

ユウ「もう・・・どっか遊びに行こうよ!!」

コウキ「え〜・・・ん、そうだ!全員が休みになったんだからさ、みんなでどっか遊びにいかねえか?」

るい「あら、たまにはいいこと言うじゃない。」

コウキ「たまにはって何だよ!」

レイジ「た、ま、に、は、な!」

コウキ「そこだけ強調するな!」

店長「うむ、コウキもたまにはいいこと言っな!」

コウキ「親父まで!」?

店長「ははは、よし、全員に特別手当を支給しよう!それどころか行って楽しんでこい!」

みんな「ありがとうございます!」

コウキ「よっしゃ!来週の土曜はどこにしようかな」

レイジ「コウキ、ここなんてどうだ?」

コウキ「お、いいじゃん」  
「ココならみんな楽しめそうだし」

店長「お、もう決まったのか?」

コウキ「ああ。ここなんてどうかな?」

店長「お、いいじゃねえか。たぶん全員行ったことないだろうな!よし、わかった!」

コウキ「あとさ、お願いがあるんだけど・・・」

店長「なんだ？」

次の日・・・

「電車 車内」

ナオ「みんなでどっか行くななんて久しぶりだね！」

理保「楽しみだよ〜」

雪「うわあ〜、外の景色が綺麗!！」

亜麻音「ホントですね セツちゃん」

るい「それよりレイジさん、これから何処に向かうの？」

レイジ「すぐに着きます。」

コウキ「おーい、ここで降りるぞー。」

みんな「はい。」

そして駅から降りて10分後・・・。

コウキ「よし、みんな着いたぜ！」

雪「え？ここって・・・まさか・・・」

コウキ「そう！シーパラさ」

みんな「おお〜〜！！！」

説明：シーパラとは、神奈川県某所にあり、イルカとアシカ達のシ  
ョーやアトラクション、更にはイルカに触る事が出来る有名水族館  
である。

ナオ「これが噂のシーパラか〜！」

みお「わくわくするどすな〜！」

コウキ「よっしゃ！今日は楽しんでいこうぞ　　！！！」

みんな「いえーい！！！」

こうして、夏休みの楽しい思い出作りが始まるのであった・・・。

V I P M E ニ ュ ー 1 ( 1 ) : E N D

## VIPメニュー1(2)：コウキの弱点

「シーパラ 園内」

コウキ「はい、これをつけていれば水族館にも一部のアトラクションにも乗れるぜ」

コウキは全員にリストバンドを渡した。

レイジ「それじゃあ、ここからは別行動で行こう。」

ここからは、三班に分かれて行動することになった。

ユウ班「ユウ 雪 ナオ みお」

コウキ班「コウキ 亜麻音 魅杏 理保」

レイジ班「レイジ るい 怜香」

「ユウ班」

雪「ねえユウちゃん、ここにはメリーゴーランドってあるの?」

ユウ「あるよ」

ナオ「この年でメリーゴーランドはちよつとな〜・・・」

みお「まあいいじゃないですか　年は忘れて、いっしょに楽しむ  
うどす　」

ユウ班はメリーゴーランドを楽しむことにした。

「コウキ班」

亜麻音「コウキさん、ここには絶叫マシンはあるんですか？」

コウキ「え、絶叫マシンか？そ、そんなものはシーパラには・・・  
」

魅杏「あるじゃない。フリーフォールが。」

コウキ『しまった！！シーパラには人気アトラクション「ブルーフ  
ォール」があるのをすっかり忘れてた！！』

注：コウキは絶叫マシーンが苦手です。

亜麻音「それじゃあ、あのフリーフォールに乗りましょう　」

コウキ「で、でもあとの二人は・・・」

魅杏「何度か乗ったことがあるから大丈夫よ。」

理保「バラエティで何度も乗ったことがあるから大丈夫だよ〜」

「

コウキ『くそ！レイジ兄め！！だからこのグループにしたのか！？』

「レイジ班」

レイジ『ふっ、今頃気づいたか。だがもう遅い（ニヤッ）』

るい「レイジさん、なんで橋の上に連れて来たの？」

怜香「そうや！アトラクションなんてどこにもないやん！」

レイジ「俺は一言もアトラクションに乗るとは言っていない。俺はあれが見たいのさ。」

るい「あれって・・・フリーフォール？」

怜香「なあ、あれ見て！コウキはん達やないか！？」

るい「ほんとだわ！もしかして・・・」

レイジ「そう、コウキはフリーフォールとかの絶叫マシンが苦手なのさ（ニヤッ）」

るい 怜香「も、もしかしてレイジさんって・・・」

注：そうです。Sです。

「コウキ班」

コウキ「早く降りたい早く降りたい・・・（ブツブツ）」

魅杏「なんかコウキさんが病んじゃってるんだけど（汗）」

理保「あはは（汗）」

亜麻音「そろそろ始まりますよ」

プア

フリーフォールが動き出し、13秒後、最高地点103メートルに達した。

コウキ「や、やばいやばい・・・」

亜麻音「わくわくします」

そして、その時がやって来た

ガコンッ！

ゴオオオオオオオ・・・！！



物凄い勢いで落ちていく

コウキ「ぎいいいいいやあああああ……!!!!!!」

落ちてから6秒後、地上についた

亜麻音「楽しかったです」

理保「私も」

魅杏「一人だけ楽しんでないみたいよ（汗）」

コウキ「……（口から霊魂が出ている）」

亜麻音「こ、コウキさん!?大丈夫ですか!？」

レイジ班

レイジ「ああ、楽しかった（キラキラ）」

るい 怜香『やっぱり、レイジさんって……』

注：そうです。かなりのDSです。

ユウ班

ユウ「ん？今コウキ兄ちゃんの叫び声が聞こえたような……」

雪「気のせいじゃない？」

ナオ「そうだよ、ここまで声が聞こえるわけないよ」

みお「ナオはん、結構メリーゴーランド楽しんでたどすな」

ナオ「うっ……／＼／＼」

凶星である。

ユウ「じゃ、そろそろお兄ちゃんたちと合流するか」

みお「じゃあウチが連絡しておくどす」

レイジ班

レイジ「そうか、わかった。じゃあシ スタジアムで待ち合わせな。」

るい「レイジさん、これから何処行くの？」

レイジ「シーパラのメインイベントさ。」

怜香「メインイベント？」

コウキ班

コウキ「もう嫌もう嫌もう嫌……（ブツブツ）」

魅杏「もう、しっかりしなさい!!」(バシッ)

コウキ「ぐはっ!!・・・あ、あれ?俺何していたんだ?」

理保「同じ言葉を何度も喋っていたよ〜」(汗)

亜麻音「コウキさんって・・・絶叫マシーン苦手なんですか?」

コウキ「・・・物凄く(泣)」

理保「そうなんだ〜(汗)」

コウキ「・・・面目ない(泣)」

ピリリリ・・・

コウキの携帯が鳴り出す

コウキ「もしもし・・・あ、レイジ兄?」

レイジ『物凄く絶叫していたな(ニヤッ)』

コウキ「やっぱり仕掛けていたのか!!」

レイジ『とにかく、これからシースタジアムに集合な。』

コウキ「お、OK!じゃ、後でな」

亜麻音「コウキさん、これから何処に行くんですか?」

コウキ「シーパラのメインイベント、ドルフィンショーさ」

亜麻音 理保 魅杏「ドルフィンショー!？」

3人は心を躍らせるのであった。

VIPメニュー1(2) : END

## VIPメニュー1(3)：コウキの逆襲(前書き)

遅れてしまい申しわけありませんでした。ようやく物語が出来ました！！

注意事項：メニュー2の店長の特徴を

「40歳くらいのコウキに似ている銀色の髪の男性」  
にしました。ご了承ください

では、続きをお楽しみください。

VIPメニュー1(3)：コウキの逆襲

「シーパラ アクアスタジアム」

コウキ「よっしゃ、みんな集まったか!」

コウ「楽しみだな〜」

亜麻音「ここでショーをやるんですか」

雪「私、イルカを間近で見るの初めてなんだ〜」

コウ「え？子供の頃に来なかったの？」

雪「う・・・うん、家が忙しくてね(汗)」

コウ「へえ〜そうなんだ〜」

通行人A「子供が子供の頃の話してるよ(汗)」

通行人B「何で子供が子供の頃という最近の話をしているんだ？(汗)」

通行人C「でもこの2人可愛い・・・//」

注：2人は20歳です。

レイジ「おいみんな、早く座らないと席がなくなるぞ。」

ユウ「じゃあ、席が足りない時はレイジ兄ちゃん立ってみてね」

レイジ「その必要はない。その時はユウの上に座って見るからな」

ユウ「は、早く席を取りに行こうね（汗）」

コウキ「よっしゃ、だったら早く行くか。」

「アクアスタジアム内」

みお「うわあ〜人がいっぱいどすな〜。」

コウキ「祝日になるといつも満員になるからな。前の席を取るだけでも大変だぜ。」

ナオ「でも今日はだいぶ遅れて入ったのによく前の席を取れたね？」

コウキ「俺達の親戚にシ・パラの館長をやっていた人がいてさ、親父が電話で連絡して席を取っておいてくれたんだ。」

魅杏「つまり、コネを使ったって事ね？」

コウキ「まあいいじゃねえか　いい席取れたんだからさ」

怜香「お、そろそろ始まるでー！」

「シヨ - 終了後」

コウキ「あゝ楽しかったぜ」

ユウ 雪「超サイコ　　！！！！（キラキラ）」

魅杏「あんたたちはホント子供ね」（汗）」

ユウ 雪「だつてかわいすぎなんだも　　ん！！！！（キラキラ）」

怜香「あんたたちのほうがかわいすぎるわ（汗）」

コウキ「だつたら、近くでイルカさんたちと触れ合いたいか？」

ユウ 雪「是非！！！！（キラキラ）」

ナオ「即答だね（汗）」

コウキ「じゃあ行くか」

みんな「おお　　っ！！！！」

「ジェットコースター乗り場」

亜麻音「ねえ、乗りましようよ！！！！（キラキラ）」

コウキ「なあ、絶叫マシンが苦手って言ったよな！！！！（焦）」



魅杏「もう、腹をくくりなさよ！」

コウキ「だけどよ〜」（泣）「

少々時間があつたので、亜麻音がジェットコースターに乗りたいたいと言いだしたのが、きっかけだ。

レイジ「そうだ、腹をくくりなさい。（にこっ）「

るい「この時点で楽しんでるわね・・・」（汗）「

コウキ「くそ〜・・・こうなったら!！」「だったらさ、レイジ兄さんも乗ろうよ!！」

レイジ「な、なんだと!？」（汗）「何を言ってるんだコウキ、俺はあまりジェットコースターは乗らないんだよ。」

コウキ「え〜？子供のときは一緒に乗ってくれたじゃん 『さっきの仕返しだよ（黒笑）』「

レイジ「あれは子供の頃の話だ。俺はもう大人だ。乗らなくていいんだよ。『貴様、俺様が絶叫マシン苦手なことを知ってるな!？』「

コウキ「だったら俺も乗らなくていいよね?」Sは打たれ弱いところがあるからな。当然わかっている（ニヤッ）「

レイジ「だが、お前の場合は女の子と一緒に乗らないといけなからな。『この野郎!Sの弱点を知り尽くしているな!？』「

コウキ「だったらさ、るいさんと怜香さんも一緒に乗らない？」

るい「いいわよ。結構ジェットコースターとか乗るから大丈夫よ」

怜香「ウチも大丈夫やで!!」

レイジ「な、なんだと!?!」

コウキ「へへっ、ざまあみやがれ」

レイジ「貴様……あとで覚えてるよ」(ゴゴゴゴゴゴ……)

こうして、2人目の犠牲者が出た。

「ジェットコースター入口」

ちなみに、このように乗っている

1 列目：亜麻音    コウキ

2 列目：魅杏        怜香

3 列目：るい        レイジ

魅杏「……なんであたしも乗ってるの!?(汗)」

怜香「まあ楽しまないと損やないか」

ちなみに、他のメンバーは下でみんなを見守っていた。

雪「あたしも乗りたかったな〜・・・」

ナオ「身長制限で引つ掛かって乗れなかったもんね(汗)」

雪「それ言わないでよ!!! (泣)」

レイジ「早く終われ早く終われ・・・(ブツブツ)」

るい「もう大変な状態ね(汗)」

コウキ「何で一番前なんだ何で一番前なんだ・・・(ブツブツ)」

亜麻音「こっちもです・・・(汗)」

ピリリリ・・・

地獄への特急列車が、動き出した・・・。

コウキ「ちょー!!今いるところ、海の真上じゃん!!」

亜麻音「すごいです!わくわくします!!」

レイジ「わくわくするものか・・・(汗)」

るい「もう大変ね(汗)」

怜香「つてもう頂上やん！早いな〜。」

そして今、地獄の特急列車が牙をむく！！

魅杏「その説明いるの（汗）」

出来れば突っ込まないでください。おかしくなるので（汗）

ゴオオオオ

！！！！

コウキ「ぎゃあああああ

！！！」

レイジ「

！！！！（言葉にできない叫び）

5分後・・・

亜麻音「はあく楽しかった」

コウキ『た、たのしいもんか・・・』（口から出た霊魂が話す）

亜麻音「コ、コウキさん！！？大丈夫ですか！？」

怜香「ほんま、マンガみたいなオチやなあ〜。」

魅杏「後ろの人もね（汗）」

レイジ『Sが乗ったらこうなるんだよ・・・』（口から出た霊魂が話す）

るい「しっかりしてよ〜。」

怜香「ってあんたもかい!!」

この後、2人の霊魂は無事体に戻った。

V I P メ ニ ュ ー 1 ( 3 ) : E N D

VIPメニュー1(4) : 大変だ!! (前書き)

VIPメニュー1(3) の続きです

VIPメニュー1(4) : 大変だ!!

「ふれあいラグーン 入場口前」

ユウ「さあ、着いたよ」

ドリームクラブのみんなは、ふれあいラグーンに着いていた。

ちなみに、あの2人は・・・

コウキ「……………(ギロツ)」

レイジ「……………(ギロツ)」

ガンとばしあっていた・・・

怜香「ってかいつまでやっとするつもりやねん!!」

ユウ「もう、早く入ろうよ〜」。

コウキ レイジ『絶対に仕返してやるからな(ゴゴゴゴゴゴ……………』

「1時間後……………」

コウキ「いや〜久しぶりに楽しんだぜ」

亜麻音「私も楽しかったです〜」

ユウ「雪」もう最高！！（キラキラ）」

ナオ「もの凄く楽しんでいたね」

みお「そういうナオはんも」

ナオ「う・・・／＼／＼」

怜香「それにしても、シロイルカと触れ合うことができるなんてめ  
っちゃええサービスしてたな！」

理保「でも、水しぶきをかけられるなんて思ってもいなかったよ。  
・・・」

るい「私もかなり浴びちゃったし・・・」

魅杏「レイジさんも血の雨を降らせていたし・・・」

レイジ「す、透けて・・・（ポタポタ）」

ユウ「妄想で！！？」

注：レイジは女性に対しての免疫が足りません。鼻血が出る事が少  
々あります。

コウキ「あ！そろそろ行かないと間に合わなくなるぜ！」

レイジ「も、もうそんな時間か・・・」



雪「ねえ、何かあるの？」

ユウ「花火だよ　夏の間、期間限定で花火のショーをやるんだ

」

みお「花火ですか　」

コウキ「ただ、人気があるから席を取っておかないといけねえんだ。」

理保「だったら早く並ばないと!!」

みんなは急いで中央広場に行った。

しかし・・・

亜麻音『あれ？携帯がない！もしかして、どっかに落とした!？』

亜麻音が別方向に走ってしまった。

「シーパラ　裏道」

亜麻音「ケータイケータイ・・・あ、あつた！」

道の途中に落ちているケータイを見つけた。

亜麻音「早く皆さんと合流しないと・・・あれ？」

道に迷ってしまった・・・。

亜麻音「……どっ？（泣）」

亜麻音は半泣きだった

亜麻音「セツちゃん！理保ちゃん！みんな〜！！（泣）」

呼んでも返事が来ない。

亜麻音「うう……恐いよお……みんなあ……（泣）」

泣きながら歩いていると

ドンッ！

亜麻音「きゃっ……！」

亜麻音は何かにぶつかってしまった。

よく見ると、黒い人影だった

亜麻音「きゃ、きゃあああ……！」

悲鳴をあげてしまった。その時、

コウキ「うわっ……って亜麻音ちゃん!？」

亜麻音「……へ？コウキさん?」

コウキ「見つかってよかった〜 みんな心配してるぜ、早く戻る

う……」

亜麻音「うわ

ん!!!（抱きつく」

コウキ「ぜ!? / / / /」

亜麻音「怖かった……恐かったよ」（泣）」

コウキ「ちょ!!! 落ち着いて!!! / / / /（慌）」

「10分後」

コウキ「だいぶ落ち着いたか? ほら、」

コウキは亜麻音をベンチに座らせた後、自販機で缶コーヒーを買ってあげた。

亜麻音「はい、ありがとうございます。大丈夫です（泣）」

コウキ「よしよし、やっぱり怖いのが苦手なのか?」

亜麻音「いえ……私ホラー映画とかが好きなので怖いのは慣れているんです。」

コウキ「じゃあなんで?」

亜麻音「小さい頃から一人でいるのが怖くて、夜に父とはぐれた時はもの凄く怖かったんです。」

コウキ「それがトラウマになっちゃったんだな。」

亜麻音「はい……(泣)」

コウキ「そっか……じゃあ俺と似ているな。」

亜麻音「へ？」

コウキ「実はさ、俺もトラウマがあるんだ。」

亜麻音「何の……ですか？」

コウキ「トラックさ。」

亜麻音「トラック？」

コウキ「ああ、幼い頃に轢かれたことがあってさ、それ以来大型トラックを見るのが嫌になっちゃったんだ。」

亜麻音「そうなんですか……。」

コウキ「それより、みんなが亜麻音ちゃんを待ってるから早く行くぜ」

亜麻音「あ……お願いがあるんです。」

コウキ「なんだ？」

亜麻音「私のトラウマのこと、話さないでくれませんか？」

コウキ「わかった、話さないと約束しよう!」

亜麻音「ありがとうございます それと・・・」

コウキ「今度は何だ？」

亜麻音「手・・・繋いでくれませんか？」

コウキ「へ!?!?!」

亜麻音「わ、私・・・暗い所を歩く時は手を繋いで歩くんです。そうすれば夜道も怖くなくなるんです・・・。」

コウキ「そ、そういうなら・・・/!/!/」

コウキは亜麻音の手を繋ぎながら夜道を歩いた。

亜麻音「・・・」

コウキ「・・・/!/!/」

沈黙が走る・・・すると、

亜麻音「コウキさんの手・・・温かいですね。」

コウキ「へ?!?!」

亜麻音「なんか、優しい暖かさというか、何というか・・・」

コウキ「そ、そうか?!?!」

亜麻音「コウキさん、」

コウキ「は、はい!?!?!?!」

亜麻音「なぜそんなに赤くなっているんですか?」

コウキ「俺・・・女の子と手を繋いだことがないからさ・・・!!」

亜麻音「そうなんですか・・・」

コウキ「そうさ・・・!!!!」

亜麻音「そういえば、私も父とお兄さん以外の人と手を繋いだことなかったな・・・(ボソツ)」

コウキ「ん?どうした?」

亜麻音「何でもありません　あ、皆さんがあそこにいますよ!」

亜麻音は待っているみんなの所に走って行った。

理保「よかった」

雪「もう、亜麻音チンどこに行ってたのよ!!」

亜麻音「ふふ、秘密です」

亜麻音の表情は、明るかった。

コウキ「・・・何て言っていたんだろっ?」

そして・・・

「 pm 7 : 30  
」

“これより、花火シンフォニアを開催します”

広場の人たち「いえ

い!」

ヒュ~~~~ド  
ンッ

ユウ 雪「た~~~~まや~~~~」

1時間後・・・

コウキ「いや~~~~最高だったぜ  
」

みお「ほんま、綺麗だったぞな~~~~」

るい「久しぶりに見る花火、悪くなかったわ  
」

レイジ「そうですね。」

ナオ「それにしても・・・」

ユウ 雪「眠い~~~~。」

魅杏「でも、これからまた歩くのよ?我慢しなさい。」

ユウ 雪「ええ~~~~~?」

コウキ「大丈夫　それも予想済みだ」

亜麻音「へ?」

プ　　ツ!!

そこに、1台の大型車がやってきた。窓が開くと運転席には

店長「よっ!!みんな楽しめたか?」

みんな「店長!!」

理保「どうしてここに!?!」

店長「コウキに頼まれたんだ。夜に迎えに来てくれないかって。」

コウキ「ユウとセツちゃんが眠いって言いだすと思ってさ」

ユウ 雪「うっ・・・」

店長「言ったみたいな。」

みんな「あははははは」

「車の中」



店長「で、みんなと遊んで楽しめたか？」

コウキ「ああ！とっても楽しかったぜ」

店長「そうか。ま、後ろを見ればわかるか」

コウキ「へ？」

コウキは助手席の鏡から後ろを見た。そこに映っていたのは、みん  
なの寝顔だった。

コウキ「・・・だな」

その後、みんなをそれぞれの家に送って行った。そして・・・

コウキ「親父、今日はありがとうな」

店長「ああ、何かあったらいつでも頼めよ」

コウキ「おう、じゃあな」

コウキは自分の部屋に戻った。

「コウキの家」

コウキ「ふう〜〜疲れた。」

コウキは家に帰った途端、ソファに寝転んだ。

コウキ「でも、楽しかったからいいか」

そう言くと、コウキは風呂に入ろうとダンスに向かう。すると・・・

コウキ「痛っ！」

コウキはダンスにぶつかってしまった。

コウキ「痛って〜ちょっと疲れてるのか・・・ん？」

コウキはダンスから落ちた縫われた赤いリボンを見つけた

コウキ「これは・・・」

コウキは暫く黙ってしまった。

コウキ「・・・」

コウキは落ち込んだ後、赤いリボンをダンスの中にしまった。

そして、着替えを持って風呂に入った・・・。

V I P メ ニ ュ ー 1 ( 4 ) : E N D

VIPメニュー1(4) : 大変だ!! (後書き)

今日の日記

ユウ「シロイルカめっちゃかわいかったな〜」

コウキ「亜麻音ちゃんなんて言っていたんだろっ?」

レイジ「るいさんが水で濡れて・・・ノノノノ(ドバドバ)」

メニュー3：るいと怜香の特別レッスン レイジ編（前書き）

だいぶ遅れて申し訳ございませんでした（汗）

注意事項：店長代理をレイジに変更しました。ご了承ください。

## メニュー3：るいと怜香の特別レッスン レイジ編

「週末のドリームクラブ」

ホストガールA「6番のお客様、延長です!」

ホストガールB「V2オーダー、チョコ1、フルーツ1」

ホストガールC「ボトルワインライト1 10番」

怜香「カラオケ入ったで」“ Ride on time ” な!」

ナオ「3番のお客様さんダウンしちゃった〜」

みお「ほんまどすかあ〜!?!」

レイジ『な・・・何なんだ!この忙しさは・・・!?!?』

みお「・・・はん・・・レイジはん!」

レイジ「な、なに?」

みお「キッチンでヘルプ頼む言うてますがどないしますか?」

レイジ「あ!えっと・・・じゃあセツちゃんとユウを・・・」

ソファにはセツちゃんが倒れていた。ユウは一人で料理を作っていたが、猫の手も借りたい状況だった。

レイジ『……ダメだ!!どうしようもねえ!!』

みお『あとあちらのお客様がクレームがあると……』

男性『フシユ……(タバコを吸って待っていた)』

レイジ『ちょ……どうすればいいんですか!?(焦)』

怜香『まったく……ダメなやつが店長代理になったもんやな……』

(溜め息)』

「ドリームクラブ 閉店後」

るい『……ええ。また次の放課後にね』

バタツ……

るい『最後のお客様が帰られたわよ(溜め息)』

怜香『だからなー!店長代理ならもつとビシッ とせなあかんで  
言ってるやん!臨機応変に!クレームにビビってどうすんねん!』

レイジ『……すいません(ず〜ん)』

コウ『あんなレイジ兄見たことないよ(ヒソヒソ)』

コウキ『全くだ、スーパーレアだよ(ヒソヒソ)』

るい「怜香ちゃんどうかしたの？」

怜香「・・・いやな、レイジさんにもう少ししっかりしてもらわな  
と思うてな」

るい「確かに・・・最近ホストガールが足りてない現状も考えると  
ね〜。セツちゃんなんかかけ持ちだし・・・」

ユウ「セツちゃんがないと厨房も大変だよ〜><」

コウキ「実際、ホスト部でもレイジ兄が店の運営をほとんど受け持  
っているから店長代理に大抜擢だと思ったんだけどな・・・」

レイジ「ホスト部は学園内で運営してるからここまで多いとは思わ  
なかった・・・ここまで忙しいなんて思わなかったよ・・・(どよ  
〜ん」

怜香「そこでや、うち考えたんやけど店長代理のための特訓をして  
もらうちゅーのはどうやるか」

るい「特訓？」

店長「実にいい考えではないかね」

みんな「店長！」「親父！」

コウキ「仕事大丈夫なのか？」

店長「今日は調子が良くてな、溜まっていた仕事を全部終わらせた  
からな！」

レイジ「それなら特訓に付き合ってくれないか？俺もこの店の店長代理として力を身につけたいからな」

店長「うむ、その志があれば大丈夫だろう。だったらこの修行服に着替えな。」

レイジ『こ、これは!!』

それは黒いコート、帽子、サングラス、マスクの4つだった・・・

怜香「ってなんでやねん!!（バシッ!）」

店長「はっはっは!!やっぱり怜香くんのツッコミに右に出る者はいないな!」

怜香「ポケとらんでちゃんと協力せや!!」

店長「まあまあ、レイジもあんなに気に入って・・・」

用意されたコート、帽子、サングラス、マスクを身につける

大きな鏡を見る

レイジが帽子をとる

帽子を上にあげる

そのまま下にたたき落とした



怜香「気に入ってへんやん!!」

こうして、レイジの店長代理としての特訓が始まった・・・

「1時限目」

るい先生「それじゃあみんな席について。1時限目はるい先生の授業よ。」

レイジ「授業!?!?ってその格好は!?!?」

そこには教師の服を着たるいがいた。

怜香「るいさんの本業は男子校の教師なんや。ホラ!教師ってぎよーさんおる生徒をまとめなあかんやろ?店長代理も従業員をまとめるっちゅー点では同じやと思っんや」

レイジ「うゝむ・・・確かにその考えは一理あるな」

怜香「そこで教えのプロ、るい先生に”人のまとめ方”のアドバイスを聞こうちゅーワケや!」

るい先生「ん・・・それは困ったわね・・・」

怜香「何かあるやろコツとか!」

るい先生「それがね・・・まとまってるのよ・・・いつの間にか。

何もしてないのに不思議よね」

レイジと怜香と店長はしばらく黙り想像していた……。

レイジ「……なるほど、あんなに美人だったら言うこと聞くな・  
・(汗)」

怜香「すまん。こりゃ参考にならんわ……」

店長「ピュアな生徒が多いようだ。ハハハ……じゃあ、2時限  
目は彼女にお願いしようではないか」

レイジ 怜香「彼女？」

「2時限目」

受付嬢「私にお任せください！」

レイジ「受付さん！」

受付嬢「店長代理たる者、ピュアな人間を見抜けるようでないとい  
けませんよ！」

レイジ「ま、まあ確かに、ここにはピュアな人間しか入れない……  
見抜ける力がないと店長代理として失礼だからな……しかし、ど  
う見抜けて言うんですか？」

受付嬢「まずは私が見本を見せてあげましょう。いいですか？見て  
いてください……」

そう言うと、玄関前で通行人達をじつと眺めていた。

・・・(キュピーン

受付嬢「右からピュア、ピュアじゃない、ピュアじゃない、ピュアじゃない、ピュアー!!」

怜香『ほんまに合ってるんか？ひよこの鑑定みたいやな・・・』

レイジ「ど、どうやって見分けるんですか？」

受付嬢「感じ取るんです！ピュアオーラを!!」

レイジ「ピュアオーラ!?」『なんだ・・・このプ キュア出てくるような変な名前は(汗)』と、とりあえず俺も・・・『ピュアオーラってどう読み取ればいいんだよ(汗)』

そしてレイジも読み取ってみる。

レイジ「うゝむ・・・あの人はピュアでしょうか？」

レイジが指したのは青緑色の髪をした女性だった

受付嬢「私は・・・違つと感じますが・・・」

そう言った後、その女性は空き缶を拾った。

レイジ「あ、今ゴミを捨てようつと・・・」

女性KY「ヒナのペタンコ　　！！お姉ちゃんに少しくらい金貸してくれたっていいじゃないか　　！！！」

そう叫んだ後、空き缶を遠くへ投げ飛ばす。

ガシャ　　ンッ！！

男性「コラ　　！！誰だ　　！！（怒）」

女性KY「やっべー！！逃げるが勝ち　　！！（シュタタタ・・・」

店長「まだまだのようだな・・・」

レイジ「面目ない・・・（泣）」

「帰り道」

レイジ「はぁ・・・俺、店長代理失格なのかなぁ・・・」

るい「あら、もうあきらめちゃうの？意気地なしねえ」

レイジ「そういうわけじゃないですよ・・・ただ、ちょっと自信をなくしてしまって・・・」

るい「・・・」

しばらく黙った後・・・

るい「そうだわ！この後3人でボウリングやりに行かない？」

怜香「お！ええな〜うちはOKやで〜」

レイジ「・・・って俺も!？」

るい「もちろんよ？社員交流も店長代理の大切な仕事なんだから・・・」

「ボウリング場」

怜香「はっ!!!」ゴオツ!!!」

カコオオオン!!!

怜香「よっしゃ〜!!!ストライクや!!!今日は調子ええで〜!!!」

レイジ「すごい・・・まるでプロじゃないか・・・」

るい「そう!怜香ちゃんはプロボウラ を目指してるのよ」

レイジ「なるほど、どおりで・・・」

るい「でも、プロ試験にもう何度も落ちてるのよね・・・」

レイジ「え!?!あれで!?!」

るい「でもねあの子、絶対にあきらめないの。どんなに辛くても、どんなに挫けそうでも負けてたまるもんか 　　って・・・私、怜香

ちゃんの姿にいつも励まされてるのよ・・・」

レイジ「 怜香・・・さん」『いつも前向きで明るい人だなんて思っていたけど、蔭ではものすごく努力していたんだな・・・なのに俺は少し上手いかなかったからって・・・すぐ自信をなくして・・・』

しばらく黙ってしまっレイジ・・・

レイジ「・・・俺、バカだった・・・怜香さんを見習わないといけませんね・・・」

るい「・・・ええ」

「翌週 ドリームクラブ」

むくっ

ホストガールD「どっ・・・どこを触っているんですかっ!!」

男性「ひくっ・・・いや〜手がうっかりな〜」

受付嬢「はあ・・・困りましたね・・・」

コウキ「ああ、確かに・・・」

レイジ「どうしました?」

受付嬢「それが・・・あちらのお客様・・・極度に酔っつてピエニアで

はなくなってしまうみたいなんです……」

レイジ「ってこの前のクレーマーじゃん(汗)」

コウキ「そっ、スーパーレアなレイジ兄を見せてくれたあのクレーマーだよ」

レイジ「それ、いらないだろ……(汗)」

受付嬢「まれにいるんです……ああいう方が……」

そこへ……

怜香「ちょっとそこのお客さん、セクハラはあかんで……！」

すっ……

怜香「ひゃっ!?!」

男性「ねーちゃんのはしまってたえ 尻だな(ワキワキ)」

怜香「……(プチッ)」

受付嬢「たっ 大変!!このままでは」

ダッ……

レイジ「くくつるき中の所失礼いたします(ペコッ)」

男性「ん……この前のボーイじゃねえか」

レイジ「（ビクッ）セ、セクハラはピュアな紳士がすべき事ではございません。故に慎んで頂きたく存じます」

怜香「レイジさん……」

男性「なんだ……じゃつまり俺はピュアじゃないって言ってるか……俺は会員証を持ってるんだぜ!!」

レイジ「はい、お客様は間違いなくピュアな心をお持ちです!!だからこそ、私が申し上げていることをご理解いただけると……そう信じているのです」

男性「……」

しばらく黙る男性

男性「……ふつうは追いつくよな……こんなヤツよ……（ポリポリ）……地と飲みすぎたみて　だな悪かったぜ……ホストガールにボーイさんよ……」

レイジ「いえ……私はボーイではありません。この店の店長代理です!」

怜香『レイジさん……なんや、言うやないか……』

その後……

レイジ「ああ……超緊張した〜〜）ドキドキ」



「コウキ「いや〜ウルトラレアなレイジ兄が見れたぜ」

受付嬢「ご立派でしたよ。ふふ・・・」

怜香「全く・・・さっきまでのが嘘みたいやな」

レイジ「す・・・すみません・・・」

怜香「でもまつ、及第点つてとこやな！」

『・・・大丈夫、きっといつかは・・・立派な店長になるで  
・・・  
・たぶんな』

メニュー3：END

メモリー3…ると怜香の特別レッスン レイジ編（後書き）

今日の日記

ユウ「この前は面白いレイジ兄が見れてよかった」

コウキ「インターネットにアップしようっと」

レイジ「ちょー！勝手にするな！！（焦）」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2392t/>

---

DREAM C CLUB NIGHT (ドリームクラブナイト)

2011年11月27日05時49分発行